

## 西ヨーロッパ初期中世の修道院蔵書

山田 欣吾

いま一橋大学が所蔵している書物は1,553,701冊にのぼるといふ。国立本館図書館所蔵分だけでほとんど100万冊に近く、特別の意味で「貴重」とされる古典資料センターの蔵書でさえ61,767冊を数えるという。

私などの感覚からすれば、この数字はどれくらいものとしか言いようがない。しかし、これでびっくりしているようでは、現在の図書館事情に疎いこと甚だしいとしたものらしい。国内を見廻すだけでも、近く500万冊の大台を越すといわれる国立国会図書館をはじめ、規模の点で一質はともかく一橋を上回るか、これに匹敵する程度のものが二桁台にのぼるといふのだから驚かされる。蔵書数100万程度の図書館は並の大図書館とよばなければならないらしく、そうした規模の図書館一つ一つではどうにもならない「部分性」を克服するためのシステムづくりに、現代の図書館問題の最大の難かしさがあるのだという。「末期」をむかえたとはいえ、書物文明の時代を象徴するどれくらい数字である。

ところで、8世紀末から9世紀にかけてのいわゆる「大フランク帝国」の時代は、およそ古代らしい蔵書史の上で、この上なく貴重な再建の時代であるとともに、つづく中世の蔵書史の基礎をつくり、長くそのあり方を規定した出発点でもあった。

カール大帝と後継者ルードヴィヒ敬虔帝は、壮大な「神の国」を建設しようという企ての重要な一環として、studium（学問）の振興に精力的な努力を傾けた。それこそが神の最奥の意志を明らかにし、人知によって世界の支配に至る営みであるはずだと確信されていたからである。カールはそのために、ブリテン諸島からイタリアに至るヨーロッパ全域から、文字通り最高の知性を宮廷に招くとともに、ほとんど消え失せようとしていた書物を探し集め、杜撰なテキストを正し、それを正しい文字で書写せしめ（カロリナー小文字）、また新しい書物が書かれるのを促した。こうした活動は、794年らしい事実上の常在王宮となったアーヘンをはじめ、それと密接な連繫をもつ各地の大修道院で展開され、その結果、これら活動中心地に、全く新しい質をもった大規模な蔵書ができて上ったわけである。

8、9世紀の西ヨーロッパでそうした大規模蔵書を築きえたのは、アーヘンの宮廷のほか、以下のような少数の修道院であり、それらは数ある他の有力教会、修道院、教院の一般水準を遙かに抜いていたといつてよい。南からそれを見てゆけば、イタリアではベネディクト派の本山格で、カールが特に懇望して宮廷に招いたランゴバルド人パウルス・ディアコヌスの活動の場でもあるモンテ・カッシノ（Monte Cassino）、アイルランド人聖コロンバヌスによって開かれ、古典古代作家のテキスト伝承に大きな役割を果たしたボッビオ（Bobbio）。アレマニエンの地域では、互いに激しく対抗、競争しつつ共に遜色ない学問・文化中心としての地歩を築いたザンクト・ガレン（St. Gallen）とライヘナウ（Reichenau）。またガリアでは、宮廷に集う学者のうち最大の詩才のもち主といわれる西ゴート人テオドゥルフのもとで、非常に多彩な蔵書をつくりあげたフルーリー（Fleury）、宮廷学者群の自他ともに許すリーダーでアングロサクソン人アルクインの指導のもと、名声轟く「学校」を組織したトゥールのサン・マルタン（Saint-Martin）、フランク王の古い家修道院として、事実上、

延長された宮廷の機能を担当したパリのサン・ドニ (Saint-Denis)、この時代に特に旺盛な写本活動を行ったことで知られるコルビー (Corbie)。さらにライン川以東の地域では、歴代諸王の格別手厚い育成により、王権の最重要拠点たるライン中流域全体に絶大な支配力を誇ったロルシュ (Lorsch)、ボニファチウスがゲルマン諸族への布教基地として設立し、フラバヌス・マウルスのもとでヨーロッパ全域にその学問の影響を及ぼしたフルダ (Fulda)、それに、以上のものよりかなり遅くスタートしながら、東フランク諸王の庇護のもと、後期カロリンガー時代には最も活発な写本製作所となるレーゲンスブルクのザンクト・エンメラム (St. Emmeram) の各修道院である。

これら蔵書の相貌を再構成しようとする諸学者の、長年の怖るべき研究にもかかわらず、それは依然としてはっきりした輪郭を見せるには至っていない。モンテ・カッシノ、フルーリー、サン・マルタンなどを見舞った戦火と掠奪をはじめ、どの蔵書も、それぞれ異なる、しかし一様に痛ましい運命の悪戯に弄ばれて、当時のまとまりを多少とも無疵のまま今日に伝えるものはないからである。例えばフランク帝国の分裂とともに、9世紀中葉の時点で完全に解体してしまったアーヘンの蔵書は別としても、16世紀までは割合に安定した連続性を保ったとされるフルダの中世手書本群でさえ、つづく100年間にほとんどすべてが何処とも知れずに散逸してしまったという。今日、カッセル、バーゼルをはじめ、ゲッティンゲン、レイデン、パリ、ローマ、ウィーン、ヴォルフエンビュッテル等々の図書館で再発見されているものは、フルダの旧蔵書のごくささやかな遺品にすぎないという。

したがって、初期中世の修道院蔵書の実体に迫り、とりわけその規模を知ろうとする研究者の関心は、当然のことながら、これまた極めて偶然の機縁で残された同時代の目録類の探索にむけられることになる。そして、この分野の研究はそれなりに豊かな成果を収め、例えば、ドイツ語圏については、バイエルンとウィーンの学士院から、それぞれ „Mittelalterliche Bibliothekskataloge Deutschlands und der Schweiz.” (既刊4巻8冊) および „Mittelalterliche Bibliothekskataloge Österreichs.” (既刊4巻5冊) というシリーズが刊行されつつある。ただ、そこに収録されている目録の大部分は中世中期以降のものであって、初期については極めて少数の、しかも取り扱いの難かしい記録しかないのは已むをえないが、それでも、それらを共時的、通時的につきあわせることにより、今日ではその時代の修道院蔵書の規模をほぼ把握することができるようになっている。

そうした方法によってこれまで確認できた限りで、中世初期最大の蔵書であったとされるのは、ロルシュ修道院のそれである。すなわち、ラインフランケンこの大修道院が9世紀中葉につくった目録には、少なくとも590冊の codices (羊皮紙綴じ本) が記載されているという。1冊の codex はしばしば複数の作品、教説、文書などを合わせて収録しているので、内容的観点からする書物・文献の点数はこれより遙かに多くなるが、その数を確かめることはできない。また、このカタログは他の同類史料に較べて、書誌的な意味でかなり細心に作られているとはいわれるものの、網羅性についての保証があるわけではなく、他の材料とつぎ合わせると、あれこれの文献が落ちているといった「精緻」極まる議論もなされているようだが、大勢的にみて、9世紀ロルシュの蔵書規模を約600冊とおさえることにそう問題はなさそうである。

同時代のザンクト・ガレン、ライヘナウの史料もこれと余り大きく隔たらない数字を示している。すなわち、ザンクト・ガレンの場合には、9世紀後半に「蔵書役」(bibliothecarius) リウトハルトによってつくられた大きな目録をベースに、修道院長グリマルト(872年没)時代の新収書リストなどを加えて428冊と数えられている。一方、ライナヘナウについては、822年の蔵書目録—半世紀にわたり同修道院の写本活動を指導したレギンベルトの手になるもの—だけで少なくとも415

冊を下らぬ書物が確認され、ほかに追加リストの断片が4つ残されているという。時代はこれよりやや降るが、10世紀末ザンクト・エンメラムのカタログは、古典文学作品を全く除いて、513冊のcodicesを記載しているという。したがって、カロリナー時代においては、蔵書数400~600codicesといった線が最大規模のビブリオテークたりうる資格条件であったとみることができるわけである。

これは、書物の時代に生きるわれわれの感覚からすれば、兎戯に等しい数字である。いや、われわればかりか、逆に時代を溯って古代ローマ人の目から眺めても、間違いなく憐れむべきものと映ったに違いない。文運盛んなりし頃の古代社会では、読書はごく平凡な市民的教養生活に属し、神殿や浴場といった公的生活の中心には国家の手で大きな蔵書が備えられて、その数は1万巻（パピルスに書かれた巻き本）にもものぼったといわれるからである。しかし、書物の量についてのこうした巨視的比較は、たしかに各々の社会における文字文化の浸透度を測る意味などにおいて、意外に有効な方法であることは確かだが、各時代の蔵書が当該社会の中で果たした役割を問うことになると話は別になる。この興味を満たすためには、巨視的、数量的比較の場合とは質の異なる比較史的想像力を働かせつつ、時代そのものの中へ入って行かなければならない。

初期中世の西ヨーロッパ社会の場合、まず押えておくべきことは、それが文明の辺境に位置し、全体として、ようやく未開性克服へのスタートラインについたところであったということ。例えば文字の知識についていえば、この社会では唯一の文字言語であるラテン語に通じ、およそ文字というものを読み書きできたものはごくごく少数であった。しかも、そうした識字者は完全に聖職者に限られ、俗人はすべて貴族も例外でなく、俗語口誦文化の世界で生活していた。そのほか、経済的にも技術的にも、文明的基礎条件はまことにプリミティブなものであった。それにもかかわらず、カロリング朝の諸王は、この未熟な諸条件の上に、あの大政治世界を築くことが出来、それを学者たちは「大フランク帝国」とよんだのであるが、この支配形象は、実は、いかなる意味でも世俗的国家の枠に収めうるようなものではなく、結論だけを言い放っておくならば、その真の内実、多民族的キリスト教人民の「教会」組織にはかならなかつた。実際、同時代人はこの宗教・政治の世界をよぶのに、「教会」(ecclesia)という言葉いがいに、他の何らの国名も知らなかつたのである。

王にとっては、人民を「教会」に組織し教化し、「教会」を改革し強化することが、われわれの言葉でいう「国づくり」の目標そのものであったから、この事業をになうべき聖職者の教育とその前提としての学問の振興とが諸政策中のまさに核心的位置を占めたのは当然であった。そこで王は、既にのべたように、学問と教育の中心機関としての修道院の育成に異常な熱意を傾けたのであるが、そうした際に王が修道院に何を期待しないし要請していたかを知ることのできる文書が残っている。「文を促すことについての勅書」とよばれる小さな文書で、8世紀末カールからフルダ修道院長パウグルフに宛てられた指令書である。

カールは、その中でまず、正しい行動は正しい知識によって保証される、と前置きしたのち、近頃中央へ送られて来る諸修道院からの報告書を見ると、熱意の旺盛さはよく分るが、不正確な表現が目立ち、聖書の理解に甚だしい欠如が認められると問題状況を指摘する。そして、言葉と思想の誤りはまことに危険であるから、これを正すために「文の研鑽を怠ることなくその学習に努め」、「もって聖書の秘義をより容易かつ正確に会得すること」に資するようにと指示する。けだし、聖書には様々の喩法や語法が使われているから、「文の力によく通じているものは、よりす早くその靈意を理解することができるからだ」というのである。

見られるように、この勅書は学問というものの最終目標を、あくまでも宗教的な意味で聖書を正

しく把握することに定めるとともに、そこへ達する道は文法や修辞学などを修めて「文の力」に通ずることなしには開かれぬというイデーを表明している。これは、アルクインが教育論その他において倦むことなく説いた考えであるが、それは同時に、学問についてのまさに「カロリナー的」指導理念として、アーヘンの宮廷から諸修道院までの学問・教育実践を方向づけたものであった。そして、文というものへのこうした姿勢をカロリナー人たちにとらしめた理由は、かれらがほとんどナイーブな尊崇をもって古代末期の教父たちをひたすら学んだという事実そのものにある。つまり、かれらは教父たちが自明のものとして前提していた古代的教養水準を、いわば「中世的未開」のただ中で、懸命にキャッチアップしなければならなかったわけである。

カロリナー時代の修道院蔵書の内容は、そのような学問の目的、理念、状況をよく映している。その特色をごく概括的にいえば、つぎのようなことが挙げられるだろう。まず目立つのは大量の聖書テキスト群。しかも、同一テキストの副本が多数備えられるという形ではなく、様々の異本やラテン語いがいの諸本をも含む多様なテキストが集められており、真に正しいテキストへ到達するための努力を明らかに示している。また、宗教的実践のための諸文献、例えば様々な典礼書、聖歌集、説教集、聖務規範書、修道戒律などの大群があったことはいまでもない。

だが、何といってもこの時代の蔵書の中核をなすのは教父の手になる諸文献であって、アウグスティヌス、グレゴリウス、ヒエロニムスなどの古代的教父を筆頭に、カシオドルス、インドルス、ベダなどを経て同時代のアルクイン、フラバヌス・マウルスなどに至るまで、文字通り全キリスト教教父の著作がまことに旦念に集められていた。とくにアウグスティヌスなど若干の古代教父については、どの大修道院蔵書もほとんど全ての作品を筆写・所蔵していたといわれる。

また、もう一つのきわだった特徴は、古代的自由学芸に関する文献が非常に多いこと、古典作家の文学作品や、古典期いろいろの地理学、自然誌、医学、建築学、兵法等々の文献も、数こそ少ないが多面的に所蔵されていることである。自由学芸の中では文法、修辞学、詩学の教本が特に多く、この時代の学僧養成において、そうした古代的基礎教養の習得がいかに重視されていたかを雄弁に物語っている。かつて中世文献学の泰斗パウル・レーマンは、中世修道院蔵書全体の中で「典型的にカロリナー的」なるものの特徴を、内容の多様性という点に認めたことがあるが、そのような印象は、なかならず、カロリナー期の蔵書が非キリスト教的古代文献に対して開かれた関心を示していることによって強められたものであろう。事実、この時代の蔵書と較べて、中世中期に成立した修道院蔵書は、一般に狭い神学的領域への著しい収斂を示すことになるのである。

最後にもう一つだけ、歴史についてふれておけば、この分野もまた極めて多彩な巾の広さを見せており、古代から同時代にいたる様々な歴史叙述が集められ、また恐らくそれらを掘り出す努力も競ってなされたものと思われる。歴史叙述へのこの高い関心は、各修道院自身が同時代「世界」の歴史を編年史の形で書き継いだという歴史意識と確実に繋がっていたであろう。また、これとジャンルは違いますが聖者伝のコレクションも見通しが困難になるほど数を増し、9世紀のザンクト・ガレンではその利用便益のために、一種の人名索引がつけられて、約350人の聖者の伝記をいろいろな「綴じ本」の中から見つけ出せるようにしてあったといわれる。

以上、初期中世の修道院蔵書について、内容的特色を若干ながめてきたが、いずれにしろこの蔵書は、後の時代の尺度に照すならば、救い難い偏りと狭さを示していることは言うまでもない。しかし、それは同時代の人々にとっては、二重の意味で十分に全体的なものであったと思われる。まず、第一に、カロリナー期の学僧たちが若々しい活力をもって努めた学問は、神の最も奥深い意志を探り、世界についての知の総体を把握することを窮極目的にしていたという意味において。そ

して第二に、教会の暗い一室に恐らく櫃深く収蔵されていた 600 冊の「綴じ本」は、かれらの世界に見出される書物の全部だったという意味において。この 600 冊の全体性に照り返される時、書物の時代における 100 万冊のペシミスティックな部分性は一体何を意味しているのだろうか。

#### 主な参考文献

- Bischoff, Bernhard. *Die Hofbibliothek Karls des Großen*. in: *Karl der Große. Lebenswerk und Nachleben*. Bd. 2. Düsseldorf (1965) 42–62.
- Brunnhölzl, Franz. *Der Bildungsauftrag der Hofschule*. in: *Karl der Große*. Bd. 2. S. 28–41.
- Buzas, Ladislaus. *Deutsche Bibliotheksgeschichte des Mittelalters*. Wiesbaden (1975).
- Christ, Karl, ergänzt von Anton Kern. *Das Mittelalter*. in: *Handbuch der Bibliothekswissenschaft*. Bd. 3: *Geschichte der Bibliotheken*. 1. 2. Aufl. Wiesbaden (1955) 243–498.
- Fischer, Bonifacius. *Bibeltext und Bibelreform unter Karl dem Großen*. in: *Karl der Große*. Bd. 2. S. 156–216.
- Fleckenstein, Josef. *Die Bildungsreform Karls des Großen als Verwirklichung der norma rectitudinis*. Bigge-Ruhr (1953).
- Illmer, Detlef. *Erziehung und Wissensvermittlung im frühen Mittelalter. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte der Schule*. Karstellaun/Hunsrück (1979).
- Lehmann, Paul. *Die alte Klosterbibliothek Fulda und ihre Bedeutung*. in: *Aus der Landesbibliothek Fulda*. 2 (1928) 5–12. Auch in: Lehmann. *Erforschung des Mittelalters*. Bd. 1. Stuttgart (1959) 213–231.
- Thompson, James Westfall. *The medieval library*. Chicago (1939). Repr. New York (1963).
- Wallach, Luitpold. *Charlemagne's De litteris collendis and Alcuin*. in: *Speculum* 26 (1951) 288–305.

(一橋大学経済学部教授)